漢法苞徳塾資料	№. 118
区分	診断論・触診
タイトル	**尺皮診　(尺膚診)**
著者	八木素萌
作成日	1995.03.15

A.「尺皮(尺膚)診」については、『内経』『難経』に記載されているが『難経』の記述に従うほうが、臨床的には適切であると認識される。この『難経』の尺皮(尺膚)診の関する記述では、「尺皮(尺膚)」も「脈」も「色」も、それぞれに体調の示しているところの、病理的・生理的な意味内容を表現しているものと把えていることが、明らかにわかるような記述となっている。

B.『難経』の「尺皮(尺膚)診」に関する記述を以下に表示する。

五行	木	火	土	金	水
五臓	肝	心	脾	肺	腎
五色	青	赤	黄	白	黒
五脈	弦	鈎	代	毛	石
尺皮(尺膚)	急	数	緩	濇	滑
五気	風	暑・熱	労倦・湿	燥〔涼〕	寒〔冷湿〕

重要なことは、「尺皮(尺膚)」の状態を表現している語を、臨床的に平明に理解することである。

心）例えば「心」の場合の「数」とはどういうことであろうか？

五行的に言えば「心」は「火」に配当されており、その基本的病証は「身熱」とされ、「五兪穴」の内「滎火穴」が「主治」するものとされている。ここから、まさに「熱」が出ようとしているときや、いま絶頂あるとき、また、絶頂を過ぎて下り始めたときなどの、尺皮(尺膚)の状態を想起して欲しいのである。

皮膚は「赤黄」色味を帯びて、色は浮いて感じられる。「熱」が高ければ、あるいは、熱の勢いが強ければ、熱の場合の「色」＝「赤黄」は益々浅く浮いている。発汗があるときと無いときがあって様子はかなり異なっているが、「発熱」していると言う共通点も看られるのである。

陽・腑の病の場合の色は、浮いて浅く鮮明な色になり、陰・臓の病の場合には、その色は深く（晦暗・枯衰）熏(くす)んでいる。

何れにせよ、「熱」の場合に特有の色調と雰囲気がある。この様子を正しく理解できるためには「……蓋十法者、辨其色之気也。五色者、辨其気之色也。気者色之変、色者気之常。気因色而其理始明、色因気而其義乃著也。……」〈【望診遵経】清・汪宏〉（蓋シ、十法トハ、ソノ色ノ気

ヲ辨ズナリ。五色ハ、其ノ気ノ色ヲ辨ズナリ。気ハ色ノ変・色ハ気ノ常ナリ。気ハ色ニ因リテ、其ノ理ワリハ、始メテ明ラカナリ、色ハ気ニ因リテ、其ノ義乃ワチ著ワルモノナリ。）という事が理解されている必要がある。

熱の時に見られる尺皮(尺膚)の状況を「数」と表現しているのである。

腎）これと同じように、［腎」は五行的には「水」になぞらえられ、配当されている、季節にあっては「冬」、方位にあっては「北」に配当されている。「主治」するのは「合穴」であり、代表的な病証は、「逆気而泄」と表現されている。

尺皮(尺膚)の「滑」と表現されている状態を、たんに「ツルツルとして滑る状態のようなこと」と理解するのは全く正しくない。

『難経』では「腎」の脈状を記述するときにも「滑」を用いている所がある。

〈１５難〉:「……冬脈石者・腎北方水也・万物之所蔵也、盛冬之時、水凝如石、故其脈之来、沈濡而滑、故曰石。……」。

〈１３難〉:「……色黒、其脈沈濡而滑……」。

〈５難〉　:「……挙指来疾者、腎部也。…」。【註－疾(しつ)は実(じつ)－音近の仮借】

〈４難〉　:「……腎肝俱沈、何以別之、然：牢而長者肝也、按之濡、挙指来実者腎也…」

などである。これらの表現を統合的に理解しようとすることが、必要であると考える。

脈が沈んでいて牢く、氷の上を滑るような感じであり、指を浮かべると、弾くように撥ねかえる脈状であるから「石」という、と言うのである。

では、「腎」の状態が表われる場合に、尺皮(尺膚)に視られる「滑」と表現されているのは、「氷の表面の冷たくて湿っぽくて滑るような」感じの状態を表現しているのであろうか？

明らかにそうでは無い。絶えず自汗気味でヒンヤリと冷たい皮膚の状態を言うのである。

それは「腎」が「玄府」（汗孔）の「開闔」（開閉）を主っているのであるから、つまり、「腎」が正常であれば、体温の調節の為の「汗孔」の自律的な開閉が適切である。しかし、「腎」が病むと「冷や汗」をかきやすくなり、何時も自汗 しおり、身体が暖まらずに「ヒンヤリ」し、また、「寒がり」であり、「冷えを嫌う」。こう言う場合の皮膚の状態が「尺皮(尺膚)」で明らかに見られる。それを、一口で「滑」と表現しているのである。

脾）「脾」は五行的には「土」に配当され、季節では「長夏」〈夏土用〉、方位では「中央」に配当されている。「主治」するのは「兪穴」であり、代表的な病証は「体重節痛」と表現されている。尺皮(尺膚)の状態は「緩」とされている。

「脾」は肌肉を主っているとされる、これが病むと、飲食した栄養を「肌肉に化」してやる働きが傷害されることになる。したがって、「飲食労倦」と言う「脾」にとっての「邪」によって「脾」が冒されると「肌肉」が充実できない。それのみか、「張り」が衰えたり、「肉が痩せた」

り、また「ハリのないムクミ」を来す。一口で言えば「実がない」「スカスカ」な「肉」なのであり、肉体的に充実していなくて「力がない」「張りがない」のである。そういう状態を「緩」と表現している。

肝)「肝」の五行は「木」、季節は「春」、方位は「東方」に配当されている。尺皮(尺膚)の状態は「急」であるとされる。「コワバリ」の状態が見られると言うことである。マッサージを行なう治療家が「筋膜が固い、酒を飲みすぎたのかな？」と言うように、「筋膜」が「ノビヤカ」な状態は良いが、「コワバリ」が見られるのは好ましくないものとされており、このような状態は「肝」の状態を反映しているのである。

「肝は筋を主る」のであり、「肝の華は爪に在り」とされている、日常の臨床において「腱」と「筋膜」の「コワバリ」として把えられるものである、また、通俗的に言えば、起床時に「掌を握ろうとするときゴワゴワして握り憎い感じ」、大阪弁に言う「手がハバッタイ」「節々がハバッタイ」と言われるような自覚症状があるのである。これを『難経』は、尺皮(尺膚)の「強」＝「コワバリ」として診るべきことを主張しているのである。

肺)「肺」の五行は「金」、季節は「秋」、方位は「西方」とされる。尺皮(尺膚)の状態は「濇」の状態にあるとされている。

「肺の絶症」(臓腑・経脈の働きが全く失われてしまって間も無く死ぬのは免れない状態のこと)の表現に「皮聚毛折」とあるが、これは「皮膚は乾いて収斂し、毫毛は折れやすく脱落しやすい」状態である。

このような皮膚の状況が、通常の病の場合には、もっとずっと軽い現象となって現われる。衛気は身体を温煦（吹き温める）しているものであるが、この衛気を主っているのが「肺」である。「肺は皮毛腠理を主る」とされているが、「皮毛腠理」を潤し温めると言う肺の機能が、尺皮(尺膚)の状態に反映される。

皮膚の色は「白」っぽくなり、その様子は寒々として収斂している。「荒れている筈も無いのに、まるで荒れているようだ」と言われる様子を呈する。ツヤが無く、一見すれば、まるで乾燥しているかのように潤いが感じられないのである。

C.「健康な人の皮膚」と「病弱な人の皮膚」の様子は、一見して区別できる。それは明瞭に異なっている。

「色」「艶」「張り」を視て、力士の体調の可否を論ずるように、「皮膚」の状態は歴然と体調を現わしている。いわゆる「厚・薄・緩・急・剛・柔・硬・軟」などを診るのである。

例えば、身体の虚弱な人の場合、乳児の皮膚のように、薄くて柔弱な感じに更に「ひ弱なもろい感じ」が加わっているのであり、透けて見える静脈は、如何にも頼りない色調で、僅かなことで溢血し、その溢血が容易には消退・吸収されない。

皮膚の「厚さ」は、手甲の皮膚を抓めば容易に観察できる。皮膚の「張り」は、皮膚を抓んだ指を放せば、皮膚は元に戻る、その皮膚が元に戻る様子・時間など、によって観察できる。その戻り具合は「弾力」を示している。健康な人・回復力のシッカリした人、回復力が良い人・強い人の皮膚は、ただ「厚い」のみではない、如何にも「シッカリ」しているのである。そして、その色調は「艶」があり「かがやき」があるもので、たんに「色が白い」とか「色が黒い」などと言うことではない。

「色」が表面的な浅い所にあって「色に深みがない」ものは「陽病」とされている。「色」に輝きがない・くすんでいる・力がないのは、病弱であったり、[陰病」であるとされている。

また、「色」の問題で大切なことは、「客色」と「主色」の関係である。

☆主色」とは五臓の色、所謂、「臓色」のことである。
「肝」＝青・「心」＝赤・「脾」＝黄・「肺」＝白・「腎」＝黒、とされてきている。この事は、別な面から言えば、体質の色に他ならない。

☆「客色」とは季節の色のことである。
季節は「春・夏・長夏・秋・冬」であるが、その気配を示しているような色のこと、それは、空の色・水の色・大地の色・樹木の色などのような自然のあらゆるものの気配を示している色、つまり「成・長・化・收・蔵」とされている季節の「気」を表現した色のことである。

「二葉の時期、若芽の時期」・「若木の時期」・「葉もたわわに繁茂している時期」・「華が咲き実が付き始める時期」・「実りと収穫の時期」・「ひっそりと潜んで春の芽吹きの時を待っている時期」の様子を見せている色合いの事、また、「乳幼児期」・「青少年期」・「成人期」・「壮年期」・「老年期」の気配を示す色のことに他ならない。別な面から言えば、冬には冬の色・春には春の色・夏には夏の色・秋には秋の色・冬には冬の色があるものである。

☆「客色」が「主色」を覆い包んでいるような「色」でなければならない。
主人は客を重んじて控えている、招かれた客が大切にもてなされていて主人や家人は控えていて目立たない。このような、「客」と「主人」の関係が良好な場合のような関係になければならない。

D．所謂、「血脈を診る」と言う場合の「血脈」については
『霊枢』九鍼十二原第１に「……持鍼之道・堅者為宝・正指直刺・無鍼左右・神在秋毫・属意病者・審視血脈者・刺之無殆。……」(……持鍼ノ道ハ堅ナルモノヲ宝ト為ス・指ヲ正シクシテ直刺シテ・鍼ヲシテ左右スルコト無ク・神ハ秋毫ニ在ラシム・意ヲ病ニ属スルトハ・審ビラカニ血脈ヲ視ル者ニシテ・之レヲ刺シテ殆ルコト無シ……）とあり、
『霊枢』寿夭剛柔第６には「……形充而脈堅大者順也・形充而脈小以弱者気衰・衰則危矣。……」(……形充チテ脈ノ堅大ナル者ハ順ナリ・形充チテ脈ノ小ニシテ以ッテ弱キ者ハ気衰ウ・衰ウレバ

則チ危フシ。…）と述べられている。

このように「血脈」を診ると言うことは、きわめて重要な診察課題となっている。「血脈」とは勿論「血管」のことであるが、これは体表において観察できるものとしてのものに他ならない。つまり、それは皮膚を透して観察可能な「静脈」以外には有り得ない。この状態を観察して体調などを判断するのである。

手甲の「血脈」の、「太さ」と「色」が、シッカリしている人は「丈夫」である。しかし、「血管が細くて採血がやり憎いし、溢血しやすい」と健康診断などの時に言われるような人は、「血管」は細く、色合いも如何にも活力が無い感じである。身体が「弱い」のである。

筋力が十分にあり、活動的であれば、局所への血行が良い訳であるから、静脈血の心への還流も活発である。従って「色」も「太さ」も「シッカリ」として「丈夫そう」なのである。運動が足りず、動作も弱々しく、身体を内から暖める力が弱い、気力も乏しいような人の「血脈」は、「色」も「太さ」も如何にも「脆弱」なものである。

E．「尺皮(尺膚)診」に緊密な関連があるものとして「皮肉連接診」と「皮膚の厚薄緩急の診察」や「膕肉〈大小・堅軟・敦厚：細薄・充緊：柔弾〉診」がある。

これらの診察は、いずれも、気血の機能状態を具体的に把握させる診察となっている。そして、これらは、「元気の程度」や「予後の判断」に重要であるのみでは無く、「治療の度合い」や「痛みや熱に耐えられる度合い」の判断にも重要である。

F．「病因」が「寒」であって、「寒」によって「傷寒」に患った場合の「尺皮(尺膚)」の状態の変化して行く姿を思い起こして、それをヒントに「尺皮(尺膚)」診察のための考え方や、態度のありようについて考えておこう。

「おー寒い、風邪引きそう…！！」と言う段階では、皮膚の色は、白っぽく乾いた感じで如何にも寒々としている。暖かい飲み物や食事をし十分に暖房が効いた部屋にくつろいだのに、「寒気」を強く感じて「熱でも出るのかな！どうも戦慄が来そうだ！！」と言う段階になると、首筋から肩へかけて凝りを強く感じている。そういうときには「尺皮(尺膚)はこわばった様子が前の濇の感じに並行」して現われている。身体の方は「発汗」によって「寒邪」を排除しようとしないのは、既に「寒邪」に冒されているから「寒邪」を排除できなくなっている。したがって「悪寒」になっているのである。さらに進んでくると、「悪寒」が強くなり「戦慄」と「発熱」が始まる。しかし、「無汗」の状態が続いて、もっと「熱が出そう」である。この段階になると、「頭痛」や「節々の痛み」を強く自覚し、体温の上昇が実際に始まっている。「尺皮(尺膚)」の様子の方には「数」と呼ばれている状態が、上記の状態に加わってくる。「発汗」が始まれば「数」の感じがもっと強くなり、「コワバリが急速に消退して行き、皮膚色の方は赤黄色味が主なよって、「汗が出て熱が下がり、カラダが［ユルム］・［ノビヤカ］になって楽になった」と言う状態になる、明らかに治癒している。しかし、病の影響が残って、体力の回復は未だしの状態である。このときは身体の消耗を表して「尺皮

(尺膚)」は「緩」の状態を見せる。

このように、病態の変化・生理的状況の変化に応じて、「尺皮(尺膚)」の状態も刻々に変化して行くのである。このような状況転換のスピードの早い変化は「脈」の変化の酷似している。そこには「病態的状態」の「寒・熱・労・風」などや「病因の五行」や「病態にとって主な役割を担っている五臓の役割の転換の様子」が明らかに示されている。つまり「意味のオーバーラップ」「意味の転換」などが見られるのである。 これは「尺皮(尺膚)診」に限らず、四診総合の立場に立つ「漢法医学の診断学」には、原理的に共通するものであると言うべきであろう。

G. 「尺皮(尺膚)診」において「五臓」と言う表現に込められている意味合いが、体表に表現されているところの「生理的・病理的状態の特性」を認識していること・観察したことを「五臓」論的に象徴させた表現と言うべき角度が主要なものとなっている。つまり、身体の状況の「寒・熱・燥・湿・労」や、「陽虚」か「陽実」か、「陰虚」か「陰実」か？などにおいて、「血脈」や「皮毛腠理」が示している体調、生理的・病態的な状況などを、尺皮(尺膚)の示しているものから診察する方法となっている。

H. 以上のように、尺皮(尺膚)の状態が示しているものには、奥行の深い含義が見られるものである。単に、ある臓腑の変動を指示しているものと、表面的に理解しまく対応できなくなっている状態にある」とか、などのような、一定の生理的・病理的な状況を現わしているのを、「尺皮(尺膚)診」で把握しているのである。

以上